

寄稿

江川の漁労文化

我が鮎獲り物語

天野 勝則（元江川漁業協同組合代表理事組合長）

挿絵：くま えみこ

■江川の漁師になる

小、中学生の頃

ふり返って見れば、江川（注1）の川辺にいつも自分の姿があった。こんな記憶をたどってみると、それは私が11歳の頃だったと思います。

小学校入学と同時に父を亡くし、母は2男1女を育てるために、ずいぶんと苦労したようです。私は長男として、子供心ながら「どうして現金収入を得ようか」という思いがありました。

中学校に入る頃から、水の冷たい時期には、はえなわをやり、裏の山から竹を切り出してウナギ籠を作り、これにミミズを拾って入れウナギを獲りに行き、水温が上がれば、川の中に入って鮎を追いかけ、お金に替えることの出来るウナギや鮎は現金に替えて、残りの雑魚が家族のタンパク源だったことを思い出します。集落には上級生もいて、川に集うようになったと思います。夜明け前の母の声が目覚まし時計代わりで、起きづらかったことは、今でも良く思い出されます。

（注1）上流では「ごうのかわ」と呼び下流では「ごうがわ」と呼びます。

青年時代：賑やかだった江川

中学校を卒業する時、叔父より、「高校へ行かせるので神戸に出て来るように」と話しがあったのです。その時ずいぶん迷いましたが、自分のために家を出て行くことなどその時は考えられず、断りました。

こうして土木作業員をやり、木こりをやり、又、炭焼をして、目の前の現金収入の仕事拾い歩いていました。この時代においても、目の前の江川はもっとも身近な職場であったものです。しかも24時間営業です。この頃の江川には、漁業を営む人達が

多く、川はどこも賑やかでした

鮎の産卵期になれば川は、川舟で溢れていました。川もきれいで水量も多く、川原の石や砂も透き通った水の中で、個々の石が、それぞれの色や形を主張しあっていたものです。

多くの川魚獲りを職業とする人達には、それぞれに個性があり、皆1人1人が一城の主であったものです。それが開発と日本の高度経済成長にともない、この江川で競争に勝てなかった人達は、一人去り二人去り、思い起こせば、私も川魚獲りを職業とするのを一度は諦めたのは19歳の秋でした。

こうして自衛隊をスタートとして、会社勤めやセールスマン、時には温泉旅館の支配人、又、スーパーマーケットの仕入から店長、そして家具の仕事とずいぶんと変わって行きました。

それでもその時代には、それなりに夢をもっていたものです。「35歳ぐらい迄に出来るだけ多くの仕事を体験したい、それから生き方を考えても遅くない」とも考えていました。それはただ言い訳程度のものであったかもわかりません。

35歳の頃：鮎漁の再スタート

江川における漁業の中に一種漁業権と言うのがあります。船を使用して網漁の出来る資格です。

35歳の頃この一種漁業権（資格）を手にすることが出来たことが、私の鮎漁の再スタートになったのです。

この頃から自営で室内装飾の仕事をしながらか、刺し網漁に夢中になっていくようになり、今迄、人と物を相手の仕事から生きた魚を相手の仕事へと少しずつ変わって行くこととなります。

このため、母や妻達に不安を与えたことは、自分では良く分かっているつもりです。そのために早く何とか形あるものを作りだしたい、こんな風に気持ち

ちばかり焦っていたようにも思えます。

回想：少年時代の七日淵での事故

あれは中学校を卒業した年の秋、9月の中旬であったろうかと思えます。

増水時、産卵のために下って来た鮎をコロガシ漁法で獲ろうと、川の中に入り込んで鮎竿を振り回しておりました。夕方になって、すぐ沖の船の上で同じようにコロガシ漁をしていた人が、その場所が漁場として良いこともあり、「船を貸すから場所を守って欲しい」と言うのです。大きな鮎の獲れる期待からすぐにその気になりました。

その夜は大きな鮎がたくさん獲れたものです。が、子供のこと、一晩中と言う訳にはいきません。疲れて眠ってしまい、気が付いた時には、船は沈みかけ、私は水の中でした。転覆しないように船を元に戻したところでロープが切れ、流れ出したのです。そのすぐ下流の、七日淵と言って、その昔、船が渦の中に吸いこまれ、七日間出てこなかったと言う言い伝えのある淵へ向かって流れて行きます。

あの淵を通り過ごせばなんとかなるだろうと思いい、船につかまって重心を保っていました。大きな渦に巻込まれて、船は水の中へ沈みはじめたのです。これは大変とばかり、力いっぱい船を蹴飛ばして逃げました。ちょうどそこは、「煮あがり」と言って、川底から水が大量に勢いよく吹き上って来る所でした。手足も自由にならないまま、もがいていますと、目の前に岩肌が見え、夢中でしがみつきました。

船は川底へ消えてしまっていました。その岩肌につかまり、下へ下へと下って行くうち、静かな水面の所へ出て来ましたので、反対側の川原に向かって泳ぎ出したのです。こうして400m位は流されたでしょうか、もっと多かったかも分かりません。

三江線鉄道の下竹やぶにつかまり、這い上がりました。この時ちょうど朝5時を告げるサイレンの音が鳴り響き、「ああ助かったんだなあ」、衣服を着たまま、「こんなことで死んでなるものか」と泳いだことを思い出しながら家に帰り、母に告げたものです。

その日の朝、下流において船は引き上げられ、引き取りの謝礼や修理で何かと物入りでした。

一休みしたあと、自転車に乗って、この七日淵の上に行ってみました。上から見ると直径1m以上もある大きな渦がゴウゴウと音を立てています。「この中へ衣服を着たまま投げ出され、向岸迄行けたんだ

から、この江川において私の死に場所はないだろう」、子供心にこんなことを思ったものです。

それからの私は、夜川へ行くのも、増水の中、船を乗り歩くことも、寂しいとか恐ろしいとか、こんな気持ちを持つようなことは無くなり、そのため、鮎も以前より多く獲れるようになったことは確かです。自信もついて来たようです。

そのため船棹にはじかれて、川の中に飛び込むことも度々で、思い出してもおかしくもあり、良き思い出です。

川船は若く身体の柔らかい時に慣れないと、なかなか上達しないものだという事は、後になって判って来たことです。

■鮎漁は一つの企業経営

§ 漁獲方法と道具の改良：体力にたよった漁業からの転換

“初めての網づくり”

35才のときに一種漁業の資格を取得したものの、網もなし。そこで漁協に出かけて行き、網を造っている人を聞き、その人から買い入れすることになります。

こうなればもう、夜が来るのが待ち遠しくて、明るいうちから川辺に出かけて行くことになります。ウェットスーツに身を包み、寒さも知らず、夢中になったものです。

1日目、2日目そして3日目と、だんだん獲れなくなってきました。この理由が何であったか、これが判るようになったのはずいぶんと後のことです。

そこで漁場を広く移動するための船を買い入れすることになります。視水器を付けて水の中を泳ぎ廻って見ると、網の状態の良くないところもあり、鮎も網に付かないで、ずいぶんと石の間をウロウロとしていることを発見したのです。

そこで、理想の網をどのように作るか、材料の仕入れに歩き、初めての網造りに挑戦したのです。

夜は川の中に入って鮎を追い、少しばかりの睡眠の後、縁側の日陰で網造りをするのです。若い時にはじっとした仕事は、これが又とてもつらいものでした。これの繰り返しのうち、気が付いてみれば秋です。ひんやりとした夕方の空気と鮎漁の終わりで、とても寂しさを感じたことは、今でも良く思い出されるのです。

ある時、暗い舟の中でじっとして考え込んでいますと、ふとこんなことに気付いたのです。

今は自分の立場で、鮎のことなど関係なしに、自分のペースで鮎を追い廻している。もし私が鮎であったなら、「どうしてこの網をくぐるか、そして安全なところで休息するか」と言うことを、あるいは、「どこへ逃げるか、どうすれば生き延びることが出来るか」を考えるとと思いますが、鮎は鮎なりにそれを身に付けているのだらうと思ったのです。

以後の漁業においては、このことは、いつも、まず頭の中に入れておくことにしたのです。その上で私の方法を変えていかなければと思ひ込むようになったのです。又、鮎は弱い魚ですから、他の肉食魚を人と同じように警戒しなければならぬだろうとも思っているはずで。

いつも同じ所で漁をしていては、だんだん獲れなくなることが判って来れば、又、新しい所を探し歩かなければなりません。川では私一人と言う訳ではありませんので、他の人達が出来ない所へ足を入れなければ多くを獲ることが出来ないのです。

そこで通常は考えられない早い瀬に網を入れることにしたのですが、網は元々こんなところで網漁をするようには作ってない。どうすればいいか。まず、網の出し始めを小形のイカリを作って止めることとしたのです。(技術編「川に入っていく刺し網漁の手順《網入れ》網入れの最初」参照) このため、少々瀬の場所では網が止まるようになって来ました。

こうしてイカリと網を持ち歩くのは体力がいります。それに網の終りの部分の流れで、一番必要なところが抜けてしまうのです。

そのために、リングを作って網の終りの部分をロープで引いて止めることにしたのです。力が加わる時には、石を乗せることにしました。(技術編「川に入っていく刺し網漁の手順《網入れ》網入れの最後」参照)

さて、考えは良いものの、これだけの物を持ってどうして静かに川の中を歩くか、もう1本の手が必要になって来ます。そこで左肩に鉤を付けて、其の鉤に、網の終りに使うリングを掛けておけば良い訳だと思ひ、すぐ鉄工所へ走ったのです。(技術編「川に入っていく刺し網漁の手順《網上げ》」参照)

“もっと荒瀬の鮎を獲りたい：網の改良”

こうして歩き廻っているうちに、もっと荒瀬の鮎を獲りたいと思うようになって来ました。荒瀬の様な水の流れの速いところでは、水の抵抗が強くと網が流れてしまいます。そこで、「水の抵抗の元はウキにあ

る」と思ひ、ウキを無くすことにしました。(技術編「川に入っていく刺し網漁の手順《網入れ》網入れの最初」参照) また、流されないように網にオモリとなるリングを多く使用するのでも重くなりますが、網を引き上げる時に左肩に付けた鉤に手縄をかけていけば、重くても網が使えるようになり、労力が省ける上、鮎が沢山取れ様になりました。それに他の漁師の手が出ないところの鮎が取れたことで売り上げも上がりました。荒瀬では、魚は石の間を縫うように走りますから、網は石から石へ網がかぶさって、少しの間があれば魚が獲れることに気付いて来ました。これで網の消耗がずいぶん減り、助かったものです。

荒瀬の中を歩き廻るのは、体力もいります。そこで、水中用携帯電灯を体に装着し、カーバイトランプを使うことを止めました。(技術編「川に入っていく刺し網漁の手順《鮎を追い込む》」参照) このことにより、何度も船にカーバイトランプを取りに行く必要がなくなり、荒い石の上を歩くことが半分になったのです。

通常刺し網は、水位の下がった時に行います。今日は水位が高いから休みだ、などと言っている訳にはいきません。毎日漁をするのが職業なのでから。こうして失敗を繰り返したりしているうちに、増水時でも鮎は居るのでから、獲れることに気付きます。シーズン中、休むことは無くなって来ましたが、ただ、月夜の明るい夜は苦勞していました。

そこで月夜には、支流の小さな川の深い所で泳ぎ廻って鮎を獲ることとしたため、又、それ用の手軽な網が必要になって来ました。

このトロ場では、江川の荒瀬の網は通用しません。この時期には、荒瀬用の網、トロ場用の網、支流の手軽な刺し網と種類もだんだん多くなって来ます。(技術編「網について 網の種類」参照)

§ 販売と商品価値の向上

“自分のブランド”

この頃になると、私の漁法の真似をする人もぼつぼつ出て来ましたが、どうも続かなかったようです。今、考えてみると、ただ真似であって、なぜそうするかと言うことが判っていなかったのでは、と思ひ出されます。

「こんなに体力を使って苦勞して鮎獲りをしているのだから、むやみに安売りをすることはないな、そのためには、まず鮮度を保ち、良い鮎を獲って来

なければ、それには鮎を網からはずしたら、まだ生きているうちに氷水の中に入れるべきだな」と思うようになって来ました。そして「市場へ直接出荷することで、自分のブランドを作らなければいけない。」ある程度の漁があるようになると、そう考えるようになるものです。

舟の中で一息いれて、休息して考え込むことも度々で、「川の中を自由に歩き廻る漁業の限界を感じるようになる前に、方法を変えなければ。たとえば10年先で、自分の体力がどうなっているのか、江川の水位は、鮎の量的なものは・・・」、こんなことを考えると不安なことばかりです。

それに現在、江川は大きく、水量も多いため、どうしても手の届かない所が沢山あります。特に秋の刺し網漁を効率良くやりたいと思うようになります。

体を休めるために、夜明け前に支流の入り口に網を入れ、下って来る鮎を外すだけ、一ヶ所で2時間も粘ったこともあります。(図 支流の入口への網の張り方)

自分の体力の限界を感じる前に手を打たなければいけない。このようなことを感じるようになり、いつもどうするか考え、そのために舟を使用した漁業に変えなければと思うようになって来たのです。

“船のトモで眠る妻：一人三役に徹する”

ある夏の夜、他人が行っているように、妻を同船して舟を漕ぎ出しました。ところが舟の両サイドにつかまり、立ち上がることも出来ないのです。そこで舟のトモと言われる部分に腰を下ろして休ませました。

こうして、相変わらず川の中に入って鮎を追い廻

していました。ふとトモの部分を見ると、船外機に寄り添って頭を低くたれ、眠っている妻の姿を見たのです。

今にして思えば、今迄にこんな惨めな妻の姿を見たことは無かったように思い出されます。それ以来、一度も妻を川に誘ったことはありません。自分には手が2本、足が2本ある。それに目もあり耳もある。良いことは無いが頭も備わっている。一人二役を演じることは出来ないかと考えるようになって来ました。

今になって思い出すと、ある先輩が私のことをチンドン屋と言ったことがあります。チンドン屋は一人何役もこなして絵になるのだなと思い出し、このチンドン屋に徹したことが、後々役に立つようになって来たのです。

ここ迄来るのに4年位の年月を経ていたように思います。

“効率よく安全な漁船造り”

この頃から、夏になると、ヨットハーバー、漁港や店、色々なところを見て歩き、自分の目指している漁業のヒントはないか・・・こんな日が続きました。ある時、店の中で万引きに間違えられて、睨まれたことを思い出します。それは、「利用出来るものはないか」店内をウロウロしていますと、ふと気が付けば、私の行動を良く見張っている店員がいるのです。嫌な思いをして、これは失敗だなと思いました。

こうして出来た舟は、それまでの舟の前後を反対に使ったものです。(技術編「漁船の設備と改良 トロ場用の船」参照)この時、舟を作るための条件があったのです。まず、安全であること、増水時にも

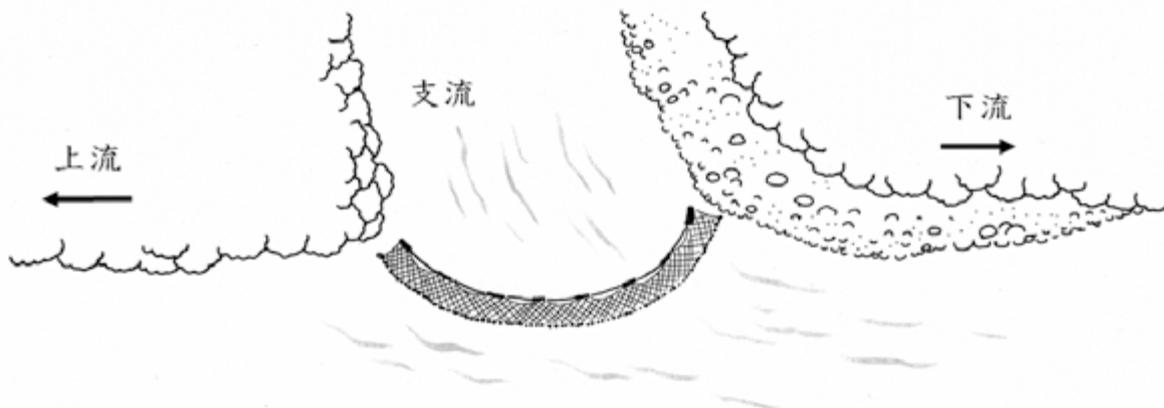


図 支流の入口への網の張り方

乗り出して行くためです。そして風に強いこと。江川も下流部では、夜半になりますと、川下に向かって「荒し」と言われる風が吹き荒れるのです。この風に弄ばれては、舟による鮎漁はできませんし、網の消耗もたまったものではないのです。

私は、この鮎漁、小さくても1つの企業として見ることにしました。1つの企業には、生産部門、販売部門、管理部門、厚生、経理、そして開発等々多くの部門があります。自分の行っていることをそれに当てはめてみることにしたのです。

その結果、生産性、営業、開発等々どれを取っても改良していくことばかりだと言うことに気がついたものです。この頃から、漁船を作ることに熱中。そして、最も大切なことは、自分の手足のごとく意のままに動かせる舟であることでした。そのために舟の写真やカタログ、サーフィン、カヌー、これらの舟の形態の良さなど、見て歩き廻ったものです。

そのため昔からある江川の川舟のイメージを無くして、無からスタートとすることにしました。安全性を保つためには、舟の幅をある程度保たなければなりません。高さが高いと風のこともありますので、低くけずり落として行きます。そして必要最小限の長さに切り落とすことになってしまいます。こうして、昔からあった高津舟を切り落とし、貼り付けて行くことをくり返すことになるのです。

たまたまこの時代は、良い材料に恵まれていました。それは、グラスファイバーと言うものです。このため、自分の意のままに作り変えることが出来たものです。これは何年式、この形は何年式と言うように楽しんだこともあります。

“網とマスト”

網を掛けておくためにマストを立て、これに回転可能な腕を付けて、舟を操れば自動的に網が出て行くようにしました。(技術編「漁船の設備と改良 マスト」参照)問題は、網を引き上げる時です。川底で網が底について上がらなくなることもしばしば。舟棹でつつき廻すと、網は破れて修理不能です。このため、網の消耗は大変なものでした。網を上げるとき、川上にイカリを下ろして、ドラムに巻いたロープをブレーキ付きのペダルをふみながら、網を上げて行くことにしたのです。(技術編「漁船の設備と改良 ウィンチ」参照)早く網を引き上げないと、ロープにかかる流水の水圧で、舟はイカリの側へ寄っていきますので、舟の上で川底の網と綱引きをしているようなものです。それでも、今迄のように、川

の中を歩き廻っている時より随分と楽をすることが出来、1番の喜びは、深い所や月夜の夜の漁業が楽しくなったことです。

身体を水の中に浸けないことは、どれほど労力を必要としないかと言うことを思い知らされたものでした。それでも、増水時や場所によっては、相変わらず川の中を歩き廻る毎夜でした。

“舟と網を一体化する”

この頃から、舟による刺し網漁を能率良くするための網作りを始め、舟と網を一体化していく。この網を使うための舟、逆にこの舟で使うため専用の網造りに専念するようになるのです。

そのために又新たに材料選びを始めることになります。まず、手縄の部分には、単線のナイロン80号の糸を使うことにします。手が痛いこともありますが、さばさばして網出しがスムーズに出来るのが良いようです。それにナイロンですから、使用した後、日陰に干すこともなく、管理が楽になりました。

網とウキを付ける糸は、大きいと結び目に網がかかりますので、出来るだけ細いものを使うことにしたのです。この時、結び目が解けない糸でなくてはなりません。こうして、緩やかな流れなら舟を使った漁業をなんとか出来るようになって来ました。

またある時、突然思いついたことがありました。それまでは、川面を、ライトで照らし棹でたたいて大きな音を出して、鮎が驚き逃げ回ることによって網に追い込んでいました。

「よし、今迄は他人と同じように水面をたたいていたがこれを止めよう。そのかわりに、川底に船棹をぶつけて音を出すようにしよう。そうすれば暑い夏でも雨衣を着なくても済むぞ。水しぶきを頭からかぶって濡れることもなくなるぞ」

そのために、舟棹の下の部分にステンレスによるリングを付け、その先をステンレス棒に変更したのです。(技術編「漁船の設備と改良 舟棹と櫂」参照)この舟棹は川底にひっかかった網をはずすためにも役に立ち、網の破れも少なく、網の消耗も随分と減り助かりました。

一つの改良により、又、思わぬところで利用出来る面があることを、この時、つくづくと感じたものです。「いっそのこと、反対側に櫂を付けてみたら・・・」又、すぐに鉄工所へ走りました。(技術編「漁船の設備と改良 舟棹と櫂」参照)

こうなれば、夜が来るのが楽しみです。網を出し

て行く途中で川が深くなってもすぐに櫂の部分で漕いで動かせる。

又、網入れをするところ迄、静かに舟を動かすことが出来るのもメリットの1つです。そして何よりも、狭い舟の中に色々と物を置かなくてすむこと、又、つまずいたりすることも少なく、能率アップに繋がることになって来たのです。

この時期の舟は、水の上に出ている部分と水面下の部分をまったく反対にしていましたので、網を上げる時に、ゆるめたロープを巻取るのに舟が蛇行して、重くてなりません。そのため、舟の中央後部に舵を付けることにし、又、鉄工所へ。(技術編「漁船の設備と改良 船が蛇行しないための装置」参照)そして、朝のうちに舟を干して、発電機を持ち出し、その部分の改良です。その夜には又使用しなければならぬのですから。

小さな改良は思いついた時点で、すぐ実行出来ますが、何日も休まなければならぬような大きな改良は出来ません。それは、翌年、春の課題となります。そろそろ秋ともなると、休息の時間は舟の中で、「あの部分をこうすればこうなる、他へ与える影響は・・・」、こんなことを考える日が続くようになります。又、これが来シーズンに向けての夢となり、翌シーズン前には忙しくなりました。

§ 経営者の体調管理

“足が痛くなる”

この時期、足が痛くて歩けなくなり、だんだん体が前かがみになり、50mも歩けば、しばらく座り込んで休まなければならなくなったのです。私、42才の厄年のことです。

昼は病院通いをし、夜は鮎漁の毎日でしたが、この時、いかに先を読むかと言うことの大切さを思い知らされたものです。鮎漁を始めた頃のままだら、若さにまかせての鮎獲り漁業を続けていたなら、これで私の鮎獲り人生は終わりになっていたのです。網を持って川の中を歩くなど、到底出来る状態ではなかったからです。

それでも休むこともなく、家と舟を行ったり来たりの日々でした。そして売上げをあまり落とすこともなく、月日を送ることが出来たのは、誠に幸せだったと思います。

この頃、苦痛に耐えるのが苦しく、日増しに形が悪くなって行く自分を見て、自分には生命保険がいくらあるかいな・・・と、夜、床の中で計算したこともありました。「3人の子供の成長と妻のこれから

の生活費には、到底足りない。やはり頑張るしかないのだな」と自分に言い聞かせたことも思い出されます。

“無線機を使う”

評判の良い病院や鍼など、良いと人の言うところは、朝暗いうちから起き出して通ったこともあります。鮎を沢山獲りすぎて、持って帰れないこともしばしば。そこで無線機を使うことにしたのです。妻に無線で、「どこへ迎えに来て欲しい」とか、「クーラーが一杯で鮎が入らないので、氷とクーラーを持って、どこに来て欲しい」などなど。こんな良き思い出が今でも楽しくよみがえります。

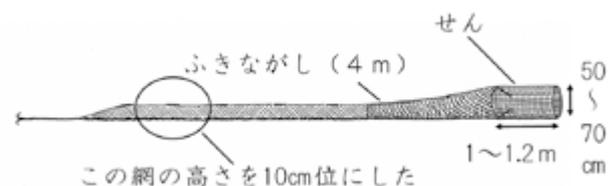
そうこうしているうちに、指圧の先生を紹介され、九州の戸畑へ治療に通うようになりました。年に4回ほど25年くらい通いました。この先生のおかげで、腰の形もよくなりました。

§ もう一つの商品

“カニ漁とゴミとの闘い”

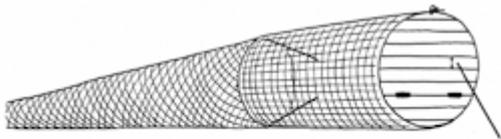
この頃、カニを取るための魚業の権利を取ることが出来て、又一つ仕事が増えてきます。カニ漁の良いところは、鮎漁の振るわない時にカニに救われるのです。

この頃は生ゴミを川に投棄する人が多く、籠の入り口がゴミでつまってカニが獲れないのです。まるでゴミとの戦いです。また、雨で増水すると落ち葉など大量のゴミが流れてくるため、網や籠の中に大量の落ち葉と家庭から出るゴミでカニの入る余地はないくらいになってしまいます。ゴミの抵抗で網が流失したこともあり、新しい網や籠を作ることになります。そのたびに改良を加えてカニだけを籠の中に取り込むことを考えるようになります。カニは川底を這い回りながら下流へ下っていきます。カニを誘導するための網を川底より10cm位の高さに作ることでまず大型のゴミをよけて流しました。



秋には落ち葉で一杯になり、落ち葉の中のカニを探すこともあり効率が悪く、小さなカニに籠の中を占領されて大きなカニは半分もなく、籠の容量の70%位入るとそれ以上は元に戻っていきますので漁

獲量は上がりません。増水の後など夜二回位はカニを出して仕掛けを沖に仕掛けなおしてみました。カニの漁獲量は増えましたが、そのために鮎漁の時間が少なくなりましたので、籠の下側の網を横に大きく広げて小さなカニが出るようにしたことで、商品として出荷できるカニは増えました。



この間隔を27mmと広くしたことで、カニの甲羅が7cm以下の大きさのものは通りぬける。

そのこと以上に良かったのは籠の中に落ち葉が残らなくなったことでした。カニを籠の中に誘導するための網を無くしてステンレスの鎖と蛍光色の鎖を使い目に見える脅しにしてみましたところ、月夜はカニが獲れないと言われていましたが、網を張るカニ漁を始めた頃より多く獲れるようになったと思います。



カニを誘導するための網を無くしたことでゴミの心配と網の流失が無くなり、楽にカニ漁をすることが出来たことは、今は楽しい思い出となりました。

“体調鮎に合わせた改良：静かな漁業へ”

腰の治療のため、戸畑市まで朝3時頃起きて出かけました。その時、夜間の工事現場で回転しているランプを見つけました。(技術編「漁船の設備と改良鮎を追い込む明かり」参照) ランプ周りに虫も居ないのです。これは面白い。さっそく使ってみようと思ひ、帰りには、それらしき店に注文に行きました。

動いているランプの方が魚を追うのには良いのではと、考えたからです。この頃から、鮎を追うのは出来るだけ静かにやってみよう、と思うようになり、静かな漁業へと変わって行きます。

「私達が舟の上で思っているように鮎は動いてくれないし、網に掛からないから、居ないとも限らない、むしろ自分の漁法に問題があるのだ」と考え

ることにしたのです。静かに鮎漁を行うことは、腰の悪い私に持って来い、の方法でもありました。

こうして、身体の方もだんだんと良くなって来ましたので、又、舟の改造をするようになって来ます。ある時、魚港の舟のイカ釣りの機械を見ました。これが1ミリのステンレスワイヤーを使っているのです。「これだ」と思い、すぐに漁協の売店に走り込みました。この小さなステンレスワイヤーをイカリのロープに使うことにより、流れによる水圧を少なくすることが出来て、網の引上げが楽になり、網の消耗も一段と少なくなったものです。

この頃、だんだん欲も出て来て、今迄舟による刺し網は、水の流れの早い瀬では出来ませんでした。流れの早い浅瀬で出来ないものかと考えるようになって来ました。これが出来れば、増水時でも、川の中に入らなくても鮎が獲れる。

このためには、今迄どおりの舟ではなく、形を変えなければ無理だろうと思えるようになりました。そして一つの漁船を使いながら、又、別の形を考え始めて1年、これは、昔からある舟の型で少々幅を小さくして、初めからグラスファイバーにより作ったものです。(技術編「漁船の設備と改良 瀬用の船」参照)

この舟は方法が違いますから、ドジをすることも多くあり、又、失敗のため、網を駄目にすることも度々でした。

“下流の船と上流の船に分ける”

その頃土師ダムの完成により、水位が随分と下がったことに気が付きました。そして水位が下がった時点での鮎の動きに変化があることにも気付いたのです。

雨により水位の上がった時、又、下がった時、そして月夜などなど。今迄の鮎とは、少し様子が違って来たことに驚くとともに、良い発見であったことを喜びました。この時、2隻目の漁船による漁法を始めることが出来たことを天に向かって感謝したものです。

江川に「えんこう祭り」と言って、水神祭りが毎年5月5日に行われます。これ以来、水神様に向かって手を合わせるようになりました。

それは、川に出てから気持ちを落ち着けるためでもあります。「水神様、今晚の漁が無事終わって、この場に舟を戻すことが出来ますように。又、子供や舟や妻達のこと、親や妻達に安心を与えて下さい」と。そのうちに子供達も大きくなり、結婚し、孫達

も増えて来ると、水神様にお願いすることもだんだん多くなってきました。帰りのお礼を申し上げることを忘れていたこともしばしばです。

土師ダムにより水位が下がり、私の漁場としております所が、危険な場所を境に2カ所に分かれてしまいました。(図 二箇所に分かれた川の図) 今日の上流部で、明日は下流部でと、していましたが、どうも計算通りにいかないのです。そこで下流部用の舟と上流部用の舟に分けるようにし、車を利用して上り下りすることにしましたのです。

このため、産卵期など途中の瀬に鮎釣りの人がいても、邪魔をすることもなく、安全を保つことが出来るようになったと思っています。こうして機動力も出来て来ますと、漁場も狭くなって来のです。

§ 漁獲調整

“競合対策：狭くなる漁場と漁獲調整”

「江川広し」と言へども、やはり点々と漁業を営む人達があります。暗黙の内に縄張りのあるものなのです。そのために限られた場所で、限られた時間をいかに生かすかと言うことが、問題になります。同じ所に、続いて網入れをしますと、鮎を獲る分だけ鮎は少なくなります。それ以上に、その場に寄

りつかなくなります。どうしても鮎が必要な時は、1～2日漁をしない日や場所を作ったりして、漁の時間をずらしたものです。

このため、毎日、出来るだけ同じ量の鮎を水揚げするためには、多く獲れる時には、生産調整を必要とする事も出来て来ました。

私は漁師と言われるのが、好きではありません。自分がそれを職業として生活しているにも関わらず、嫌なのです。そのため、昼間、人の前で鮎を獲ることは、避けて来ました。

闇にまぎれ、夜明けの霧の中で、こっそりと鮎を獲って来たものです。その動きは、忍者の如くありたいとも考えていました。毎日、必要な量の鮎を獲って来るためには、鮎を誤魔化すだけでは達成出来ません。廻りを取り囲む人々の目を忍ばなければ、不可能なのです。それだけ、江川は狭いのかと、考え込むこともあります。

人を相手の仕事から、魚を相手の仕事に変わってほっとしたのは、何も知らない一時期でした。ここに来て、又、人を意識しなければならぬなんて、やはり、生きている限り、人との繋がりを切ることは出来ないものなのかと思うようになって来たのです。



瀬の漁場(上流部) 風がなく月夜などは霧が出て上流部は暗い

トロ場の漁場(下流部) 七日淵も含め風があり、霧が晴れ、明るい。

図 二箇所に分かれた川

相変わらず春先になると、大きな部分の漁舟改良をするのが楽しく、通りがかりの知り合いは「今年も近づきましたね」と声をかけてくれます。

この年は、雨が降り出すと舟の中に溜まる水を汲み出すため、時には一時間おきに行ったり来たりを繰り返すこともあるので、如何にして舟の中に水が入らないようにするか、これが課題でした。

そして使用しない時は、フタをすることとしたのです。そのために川舟としては想像出来ない形になって来ました。舟の中には、バッテリーや電気の配線などがたくさんありますので、水没しては困るのです。そして、小型のウィンチを取り付けていますが、雨が降ると回転部分から油が流れ出したりして、どうにもならないこともありました。この部分には、フタをして、雨に濡れないようにする必要があります。（技術編「漁船の設備と改良 船を守る」参照）このようなことを繰り返し、春、鮎漁の始まる前に改良したことが、実際に漁業を行ってみると、都合の悪いこともあり、またすぐに変更をすることの繰り返しです。

雨の多い年は、水量も多く、近年、川の汚れもあって、どうしても流水の早い所へ網を入れなければならず、それに合わせて、網作り、船の改良をしなくてはなりません。反対に水量の少ない時は、トロ場と言われる深みが刺し網漁を行う漁場になって来ます。このように主にトロ場で漁をする年は楽に出来るし、網の消耗も少なく、問題はないのですが、このような時には、生産調整も必要ではなからうかと思えます。

生産調整をしないと、狭い川のことですから、数日で鮎を獲り尽して、後は、もうなし。これでは職業として成り立ちません。

§ 体力に合わせた時短

“利口者の鮎”

鮎と言う魚、大変利口者で、人々が追い廻せば、すぐにこれに慣れてきて、人の手の届かないところへと移動してしまいます。

このため、この鮎を追いかけて行くには、次から次へと新しい手口を考えなければ、生産は頭打ちになって来ます。このため、現在、自分の持てる漁舟と網による漁業から、鮎のいるところで漁業の出来る舟と網を作ることが必要になって来ます。

そのためには、まず、極端な荒瀬は別として、どんな所でも自由自在に網入れをし、又、引き上げることが出来ること、こんな夢を抱くことになって来

ます。1人で70m近い刺し網を、舟を操りながらタテにもヨコにも、又、円形にも、川下から川上へ向かって網入れしたい、このための舟の改良が又、始まることとなります。

“さらに舟の改良：誇り高きチンドン屋”

この年のおもな改良計画は、舟の両面に立ってあるマストのような部分を中心になりました。数拾秒の間に70m近い刺し網を川の中へ張って行くため、東になって刺し網が落ちて行くことを防ぐために、上からの押さえの腕を取り付けることにしてみました。（技術編「漁船の設備と改良 マスト」参照）使用しながら、どんな形が良いか、曲げたり、伸ばしたり、繰り返し漁をしながらの実験のため、時間もかかることとなります。

こうして、この問題が何となく形作られて来ると、次のことが頭の中にもち上がって来ます。どうも、私の人生には、「これでよし」と言うことがないのでしょうか。いや、「これでよし」と言うことにならないから、毎日が楽しいのだな。こう思うことにおきましょう。

こうして、ある程度自由自在に出来るようになると、今度はいかに早く能率的に、体力を使わず出来るかと言うことに落ち着くと思われるのです。

夜の仕事ですから、時短と言うことと、これから先、年老いて出来るようにするには、やはり体力と時短はもっとも必要な課題と思えるのです。

鮎の品質も、胃の中が空になる夜明け前のわずかな時間が、一番の価値ある時間です。この限られた時間を、いかに素早く、漁獲量を落とさず、身体に無理をしないで、鮎漁が出来るか、たぶん、この課題が私の鮎漁に対する最後の課題であろうかと思えるのです。このためには、一人二役を一人三役位にしなくてはなりません。

まず手始めに、網上げが終わった時点でワイヤロープ100mが川の中に出っていますが、網を整理している間に、このワイヤロープを自動的に巻取ることとしたのです。（技術編「漁船の設備と改良 ウィンチ」参照）このためモーターを使ったウィンチを作り、又、深海魚を釣り上げる大型のリールを買い入れて、実験に入りました。あまり多くの作業手順では、故障もあつたり、暗闇の中で手さぐりの状態のため、間違つたりします。1, 2, 3, これで終わり、こんな感じで操作が出来なくてはなりません。そのため、ああでもない、こうでもない、何か良い案はないかな、と又、歩き廻ることとなりました。

近頃は老眼も手伝って、店内などでポケットから眼鏡を出して使用書など見ておられますと、以前経験したように、店員の方が様子をうかがったりします。このため時々、眼鏡を同行しての買い物になります。眼鏡とは、妻のことで、妻は近眼に近く、近くが良く見えるためにこうなっていました。

こうしてリール糸を直接イカリロープにすると、どうしても石でこすったりしますし、切れる可能性も高くなるため、30cm径のドラム付ウィンチを作って、これにリール糸を巻き、ドラムを半分に仕切って片側には、ワイヤロープを巻き込むことにしたのです。(技術編「漁船の設備と改良 ウィンチ」参照)

このためリールの巻き上げる力をドラムの大きさによって倍増することも可能になり、電動リールの糸は、リールのドラムとウィンチのドラムを行ったり来たりすることで、消耗も少なく、使用に耐えることになったのです。これにより1回の刺し網で約3分位の時短と、体力の節約になって来ます。たとえば一晩に10回の刺し網を行いますと、30分～40分位の時短になります。

刺し網を川から引き上げて魚を外し、ゴミを取り、整理し終わって、次の段階迄かなりの時間を要すものです。この時間に自動的に巻き上げを行い、整理し終わった刺し網はすぐに次の所で、網出しをして行くことの出来る態勢が必要になって来ました。このためには、マストの部分が又、改良の対象になって来ます。

あれやこれやと次から次へと忙しく、こんなことをしているうちにシーズンは終わってしまいます。

生産をしながら、販売、修理、経理関係、氷の仕入れ、そして楽しみな新しい発想、これは開発部門に入りますでしょうか。鮎のシーズン中はとても忙しい毎日です。

刺し網を用意して現場に近づき、網入れを始めますと、いつものことで、魚も慣れていきますから、もう避難を始めていると思われれます。そのために、鮎がいるところを素早く巻き込む必要があると思います。そのため、浅く早い瀬以外では、舟外機を使用して網入れをすることにし、そのための舟の改良も必要になって来ました。風など吹いたりしますと、

舟から出て行く網が舟外機のスクリューにからみつくことが起こって来るからです。

又、鮎もこちらから追えば向こうへ逃げてくれると思うなど、とんでもないことです。そのような鮎もいることはいると思いますが、おおよそ、そのようなことは考えない方が良いでしょう。そのための網入れも考えなくてはなりません。

川の中に入って網を引いている時は自由に出来ることも、舟を動かして自由になると、かなり訓練を必要とすることと思います。それなりの体力に応じた舟の形も必要になって来ます。何度も申し上げましたが、「舟があるから、網があるから、魚がいるから、自分の身体をそれに合わせて使う刺し網は、昔からこうして行って来たんだ」と言うこと。これはこれなりに価値あるものですが、私は自分の動きに総てのものを合わせたいと思います。

■鮎漁師の心意気

しかし魚は生きています。

この部分だけは魚の気持ちを大事にしなければならぬだろう。こんな気持ちを持っています。相手の身になって、「私ならこうする」とか、「だからこうなんだ」と。相手(この場合は鮎です)を良く知ることが最も効率的な漁業の道と考えます。

相手、鮎を良く知れば、後は方法と手段は各人により、異なります。それぞれの体力、個性にあった方法を作りだせば良い訳ですから。この鮎の刺し網漁と言うもの、とても楽しいものです。

今迄はいつも10年位先のことも考えて計画していました。これからは、先も少なくなります。又、時代の移り変わりも早くなって来ます。そのため、5年単位ぐらいで、どのようになるかを予想しながら、眼鏡を連れての見て歩きも続けたいと思います。私にはサラリーマンのように退職金などありません。これから頑張って、「退職金だよ」と妻の手に渡してやりたいと考えています。今迄、私の行って来たことに助言はあっても、他に口出したことのない妻にせめてのお礼の気持ちとして……